

原 著

在宅要介護高齢者における口腔機能状態、 栄養状態および食物摂取状況との関連

酒井 理恵^{1,2)} 濱寄 朋子³⁾ 角田 聡子¹⁾ 廣島屋貴俊¹⁾
 邵 仁浩¹⁾ 片岡 正太¹⁾ 岡田 圭子⁴⁾ 筒井 修一⁵⁾
 岩崎 正則¹⁾ 安細 敏弘¹⁾

概要：【目的】在宅要介護高齢者の口腔機能状態と栄養状態および食物摂取状況の関連を明らかにすることである。【対象および方法】対象者は、65歳以上の要介護高齢者で、歯科診査、質問紙調査などへの同意が得られた63名（男性25名、女性38名、平均年齢±標準偏差：83.5±6.8歳）とした。口腔機能状態は、ROAGを用い、口腔内の8項目について1～3点で評価し、スコア8点で良好（以下、良好群）、9～12点（軽度低下）と13点以上（重度低下）を口腔機能低下あり（以下、低下群）の2群に分け比較検討を行った。【結果】2群間で、年齢、BMI、骨格筋指数（SMI）、握力、MNA[®]-SFに有意差はみられなかった。良好群は低下群に比べて、Alb 4.0 g/dl以上者が多い傾向にあり、舌圧35 kPa以上の者が有意に多く、認知自立度で要介護者が有意に少なかった。BDHQによる栄養素摂取量は、良好群は低下群に比べて、たんぱく質摂取量が70歳以上の推奨量以上摂取している者が有意に多く、ビタミンCの摂取量が有意に少なかった。食品群別摂取量は、良好群は低下群に比べ豆腐類、根菜類、脂ののった魚類の摂取量が有意に多く、いも類、柑橘類、洋菓子類の摂取量が有意に少なかった。【結論】在宅要介護高齢者において口腔機能状態と栄養状態、食物摂取状況との間に関連がみられた。在宅要介護高齢者の口腔機能状態の維持・悪化予防において、栄養状態のみならず食物摂取状況を把握することの必要性が示唆された。

索引用語：要介護高齢者，改定口腔アセスメントガイド（ROAG），簡易型自記式食事歴法質問票（BDHQ），
 栄養素摂取量，食品群摂取量

口腔衛生会誌 68：207-218, 2018

（受付：平成30年2月7日／受理：平成30年6月15日）

緒 言

摂食嚥下機能は、ヒトの基本的な機能であり、生きるためには大切な機能である。「食」は、栄養摂取の面からだけでなく、楽しみや喜び、家族や友人とのコミュニケーションの場としての意味をもち¹⁾、高齢者の生活の質（Quality of Life：QOL）の維持にとって重要な役割を果たす。北野ら²⁾は、歯の喪失は、咀嚼能力を低下させる結果、食事の楽しさ、美味しさなどが損なわれるため、食生活や日常生活に及ぼす影響が大きいとしている。

白石ら³⁾は、入院患者（108名、平均年齢±標準偏差：80.5±6.8歳）に対して、口腔健康状態の臨床的な評

価ツールとして有用とされている改定口腔アセスメントガイド（Revised Oral Assessment Guide：ROAG）を用いた判定による、口腔機能障害とサルコペニアや低栄養、栄養状態との関連を明らかにしている。また、Shiraishiら⁴⁾は急性期病院の脳卒中入院患者（202名、平均年齢±標準偏差：72.2±12.5歳）における口腔機能障害とサルコペニアの関連についても明らかにしている。しかし、いずれの報告も食事との関連は明らかにしていない。

一方、歯・口腔と食事との関連についての先行研究は複数あり、システマティックレビューもある⁵⁾。しかし、対象者を在宅高齢者とした報告はまだ少ない。中でも、保健所や健診会場などに集まることのできる自立

¹⁾九州歯科大学地域健康開発歯学分野

²⁾東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科

³⁾九州女子大学栄養学科

⁴⁾セイコーメディカルブレン株式会社医療経営コンサルティング部

⁵⁾豊前築上歯科医師会